

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』における戦争とサリンジャー

——精読のおもしろさ——

野 間 正 二

〔抄 録〕

J. D. Salinger's most famous story, *The Catcher in the Rye*, has been in general read as a story about a sensitive adolescent who cannot adjust himself well to his surroundings, but a small number of critics have regarded it as "a novel about war" written by "a war writer". In the essay I examine the story from the minority viewpoint to throw light on Salinger's attitude toward war. I mainly analyze only one paragraph of the story, especially one utterance of Holden's, in which it is rather difficult to understand what Holden really means. I can reach the conclusion that its ambiguity derives from Salinger's ingenious technique, and that he intentionally made it unclear because he knew his anti-war claim would not have been generally accepted by contemporary people if he had asserted it straightforwardly. Salinger, it is surmised, had a firm intention to express his strong anti-war belief, but at the same time he was conscious that it was not expedient to assert directly his radical anti-war ideas and to ask his readers openly for consent to his extreme position.

キーワード サリンジャー、戦争、曖昧性、作者の意図、読者の反応

サリンジャー (J. D. Salinger) (1919～) の代表作『キャッチャー・イン・ザ・ライ (*The Catcher in the Rye*)』(1951) は、一般的には、繊細な心をもった思春期の少年が、自分のまわりの世界とうまく適応できずに、傷つきさまよっている姿を描いた作品と見なされている (Pinsker ix)。いわゆる青春小説だと見なされてきた。しかしたしかに、「作家が気の毒だろうか？」というサリンジャー自身の投書 ("Sorry for Writers" 20-21) を援用して、「戦後の彼の主要作品は戦争小説としてみることができるであろう」(『英語青年』19) と主張する井上謙治氏のように、サリンジャーを戦争作家だと見なす研究者はいる。だが、それは少数派である。しかも麻生亨志氏などを除けば、その視点から、作品を具体的かつ綿密に検証した研究は

ほとんどなかった。そこでこの論文では、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のなかの一段落を精読することで、主人公のホールデンが戦争にたいしてどのような態度をとっているかを検討し、戦争作家としてのサリンジャーを考え、あわせて精読のおもしろさを指摘したい。

I

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のなかに、つぎのような一節がある。

After the movie was over, I started walking down to the Wicker Bar, where I was supposed to meet old Carl Luce, and while I walked I sort of thought about war and all. Those war movies always do that to me. I don't think I could stand it if I had to go to war. I really couldn't. It wouldn't be too bad if they'd just take you out and shoot you or something, but you have to stay in the *Army* so goddam long. That's the whole trouble. My brother D.B. was in the Army for four goddam years. He was in the war, too — he landed on D-Day and all — but I really think he hated the Army worse than the war. (140, underline mine)

このときのホールデン（Holden Caulfield）は、クリスマス直前の日曜日の夕方にラジオシティ（Radio City）で戦争映画を見たあと、先輩のカール・ルース（Carl Luce）に会うために、ニューヨークの街中をバーに向かって歩いている。「私（I）」はホールデンを指す。つまりホールデンは、登場人物でもあり語り手でもあるわけだ。

この引用部分は、たいていの場合、ラジオシティで映画を見たあと、ニューヨークの街を歩いているときのホールデンの姿がおもに描かれていると解されてきた。しかし注意して読むと、原文の英語では、現在形と過去形とがきちんと使い分けられていることがわかる。

過去形で書かれている部分は、引用した原文では、最初の一文と最後の二文だ。最初の文では、クリスマス前の日曜日の夜における、ホールデンのふるまいが描かれている。最後の二文では、四年間も軍隊にいた兄について、そのときにホールデンが考えていたことが描写されている。登場人物としてのホールデンが語られているのだ。

一方、その二つの過去形の文にはさまれている、現在形の文（原文では五文ある）では、その映画を見た日から約半年後の、病院に入院しているホールデンの意見が語られている。つまり現在形の文では、語り手としてのホールデンが描かれている。

さて、引用した過去形で書かれた部分では、戦争映画を見たあとニューヨークの街を歩きながら、戦争についていろいろ考えた、ホールデンは語っている。しかし実は、そのときホールデンが考えていた戦争についての意見の具体的な内容については、直接的には何も語ってい

ない。ただし、ホールデンがそのときに考えていた戦争にたいする意見を、読者が想像できないわけではない。そのときの意見は、そのときから約半年後に、語り手としてのホールデンが、現在形で語っている考えの内容と大差なかっただろうと、読者は想像できるからだ。

そして実際、読者が、引用した現在形の部分——「戦争に行かなくちゃならないなんてことになったら、きっと僕は耐えられないだろうと思う。間違いなくだめだね。もし連中が君をただ表にひっぱり出してずどんと撃ち殺してしまうとかそういうことだったら、まだ我慢できるんだ。でも君は軍隊にうんざりするくらい長いあいだ入っていないくちゃならない。それがなにしろ困った点なんだよ。」(村上訳 231)——を読むとき、この部分は、ニューヨークの街中で歩きながら考えていた意見ではない、それから約半年後の入院していた病院で考えていた意見なのだと、明確に意識し、区別して読むことは多くないと思われる。言いかえれば、現在形で書かれたこの部分は、自分が約半年前に歩きながら考えていたことを、読者に推測してもらうために、語り手のホールデンが語っている部分なのである。

では、なぜそんな回りくどいことをしたのだろうか。結論を先にいえば、それは、まず第一に、戦争映画を見た直後の「きまってそうなる (always do that to me)」ような感傷的な気分になりながら考えた、一時的な気まぐれな考えではないことを伝えたかったからだ。第二に、ホールデンは、土曜日の夜にペンシー校を飛びだして以来、さんざんな目に遭い、ほとんど眠らずに日曜日のこの夜をむかえていた。ニューヨークの街を歩いていたこのときも、ホールデンは一種の狂騒状態ともいえるような状態だった。だから、それから約半年後の病院で考えた意見としたのは、そんな異常な状態で考えた意見でないことを強調したかったからだ。なぜなら、語り手としてのホールデンは、すでに約半年間病院で心の治療をうけているからである。半年間入院したことで、ホールデンは、「来月あたり (next month maybe)」(1)には、病院を退院できるはずだと予測している。ホールデン自身も、この時点では、心身ともに調子を崩していた自分がいわば正常な状態にもどったと考えているのだ。

以上の二つの理由を要約すれば、つぎのようになる。語り手のホールデンが、このような回りくどい言い方をしたのは、戦争についての意見が、興奮状態での一時的な意見ではなく、平静で正常な心理状態での意見であることを伝えたかったからだ。つまり彼の確信であることを読者に伝えたかったからである。

では、その正常にもどっていたホールデンの意見を検討してみよう。現在形の文の最初の二文の意味は明瞭だ。戦争映画はいつも戦争について考えさせるという、ホールデンのコメントと、徴兵されて戦争に行くのは耐えられないだろうという、ホールデンの気持ちとが語られている。しかし、三つ目の文—— It wouldn't be too bad if they'd just take you out and shoot you or something, but you have to stay in the *Army* so goddam long. ——の意味がとりにくい。とくに前半の It wouldn't be too bad if they'd just take you out and shoot you or something の部分の意味がとりにくい。直訳すると、「もし仮に彼らが、あなたをまっ

すぐ連れだして、射殺するとかするとしても、あまり悪くはないだろう」となる。直訳だから、どこちないのはもちろんだが、意味がとりにくい文である。

意味がわかりにくい理由としては、つぎのようなものが考えられる。(1)仮定法である。(2) they が、とつぜん出てきて、何を指しているのか曖昧である。(3)何のために shoot（撃ち殺す）するのか、その理由が不明である。(4)どこから、どこに take out するのが不明である。(5)you は、ホールデンが読者に語りかけている「君」を指すが、どういう状況の「君＝読者」を想定しているのが不明である。(6)後半の平叙文の「でもな、軍隊にクソほど長いこと入っていないきゃならんわけだろう」との関連がわかりにくい。要するに、書かれていることが、具体的ではなく、かつ説明不足なのだ。だから、わかりにくい。文章が複雑であるからとか、文法的に破綻しているから、わかりにくいのではない。

参考までに、おもな既訳を参照してみよう。野崎訳では、「戦地に引っぱり出されてうち殺されるとかなんとかするだけならそう悪くもないんだけど」(217)と訳されている。村上訳では、「もし連中が君をただ表にひっぱり出してずどんと撃ち殺しちまうとかそういうことだったら、まだ我慢できるんだ」(231)と訳されている。

翻訳には定評がある両者の訳にも、かなりの違いがある。つまり、原文のこの部分の意味がとりにくいことをあらわしている。両者の訳のおもな違いは、原文の take out（取りだす、連れだす）を、村上訳では「表にひっぱり出し」と、「表に」をつけ加えて訳しているが、一方、野崎訳では、take out を、「戦地に引っぱり出され」と、原文には書かれていない「戦地に」をつけ加えて、受身形で説明的に訳している点にある。

II

引用した原文のわかりにくさは、先に(1)から(6)までの理由を示したように、具体的でなく、説明不足だからだ。言い換えれば、正常にもどった語り手のホールデンが、具体的かつ説明的に語ろうとしていないからである。ここでは、語り手のホールデンは、自分が語っている内容を、読者にたいしてわかりやすく十全に伝える気がないのだ。

それはなぜなのか。そのことを考えてみよう。上の引用文は、誰にとっても、曖昧で意味がよくわからない発言である。しかし一方で、ホールデンのこの発言は、戦争についての彼の意見を知らうで重要なものであると推測できる。読者にとっては、ぜひとも知りたい意見である。

では、読者には、戦争映画を見た直後だけでなく、その約半年後になっても、ホールデンが抱いていた戦争にたいする意見を理解する手段はないのだろうか。もちろん、語り手ホールデンも、作者サリンジャーも、このような肝心なことを曖昧なままにはしていない。この真意がとりにくい簡潔すぎる表現の意味を理解するカギが、同じ段落内ながら、この発言から約一頁

後の部分にある。そこで、ホールデンは、I swear if there's ever another war, they better just take me out and stick me in front of a firing squad. I wouldn't object. (141) と語っているからだ。直訳すれば、「もし今度また戦争があるなら、彼らはわたしをまっすぐ連れだして、わたしを銃殺隊の前に据え置く方がましなのだと、わたしは誓って言う。わたしは異議を申し立てないだろうと思う」となる。先に引用した引用文とその内容が類似しているのに気がつく。

もちろん、違っている部分もある。まず、先の引用文では you であったものが、この引用文では me に変えられている。先の文では、you は、読者を指してはいたが、その際に想定されている読者の状況が曖昧であった。それが、具体的に me となり、ホールデン自身を指している。それだけでなく、「今度また戦争があつて（わたしが徴兵されるなら）」という限定された具体的な状況が説明されている。

つぎに、先の引用文では語られていなかった、take out する場所が明示されている。それは、村上氏が曖昧に示した「表」でもなく、野崎氏が説明的に解釈された「戦場」でもなかった。「わたし」を take out (連れだし) て、stick (据え置く、縛りつける) 場所は、a firing squad (銃殺隊) の前だったのだ。

念のためにつけ加えておけば、firing squad は、直訳すれば、野崎訳のような「射撃部隊」(218) となる。しかし多くの場合、そういう包括的な意味よりも、もっと限定的な意味で使われる。英語の firing squad は、村上訳のような「銃殺隊」(232) という特殊な意味をもっている。犯罪人を銃殺刑に処するときの銃殺隊を意味するのだ。もちろん、このコンテキストで使われたら、firing squad は、一般的には、戦時中の戦線からの逃亡(離脱)者、上官や戦友の殺害者、スパイなどを処刑する銃殺隊を意味している。たとえば英国では、前線から逃亡(離脱)した「臆病者」にたいする死刑が廃止されたのは、1930年のことである(Holden 73)。世界の国々で、過去においては、兵役拒否者だけでなく戦争反対者などまでも、国家は処刑してきた歴史がある。だから、firing squad (銃殺隊) は、そういう兵役拒否者や戦争反対者を処刑する当局者たちというイメージを担(にな)っている。

これで、先の引用文では、意味が曖昧だった they の意味もはっきりする。they は「官憲」を意味していて、具体的には憲兵隊のような人びとを指している。その結果、just take me out の just の意味もあきらかになる。わたしの直訳では、この just をとりあえず「まっすぐ」と訳した。だが全体の意味があきらかになると、ここでは、言外に「今度また戦争が始まって、徴兵されて、戦場に送られるくらいなら、ただちに逮捕されて、すぐに銃殺隊の前に立たされる方がマシなんだ」という意味が隠されているがわかる。

以上のことを考慮すれば、先に引用した It wouldn't be too bad if they'd just take you out and shoot you or something, but you have to stay in the Army so goddam long. という文は、「今度また戦争があるなら、憲兵にすぐに逮捕されて、銃殺される方がマシなんだ

が、でも、軍隊にクソみたいに長い間入っていなければならないんだ。」ぐらいの意味をもつことになる。

そしてこの解釈が間違っていないことは、この段落の最後のホールデンのことばからも確認できる。そのことばとは、I'm sort of glad they've got the atomic bomb invented. If there's ever another war, I'm going to sit right the hell on top of it. I'll volunteer for it, I swear to God I will. (141) である。この「原子爆弾の上に進んでまたがってやろうと思う」という意見の場合でも、原文の現在形からもあきらかなように、映画を見てから約半年後に病院で考えた意見である。

もちろん、この原爆にまたがってやろうの部分は、『サリンジャー イエローページ』が解説するような、ホールデンが「のんきなことを言っている」(53) 部分ではない。しかし、「原子爆弾の上に座り込み、その後の反戦運動でいうところの、シット・インをすると宣言」（梶崎 113）しているとまでは解すべきではないだろう。むしろごく普通に、入隊して戦場で戦わなければならないぐらいなら、原爆にまたがって敵地に落下して、一気に死んだ方がマシだという考えをあらわしていると解すべきだろう。銃殺隊の場合と同じく、入隊して軍隊に長くどまっていることや戦場で戦うことへの激しい拒否や拒絶をあらわしている。（参考までに言えば、ホールデンは、最初の引用で示したように、4年間軍隊にいた兄が「戦争よりも軍隊を憎んでいたはずだ」と推測している。）原爆にまたがってやろうの部分は、言い方は「のんき」に見えるかもしれないが、「のんき」な気分をあらわしてわけではない。キューブリック（Stanley Kubrick）監督の映画『博士の異常な愛情（*Dr. Strangelove*）』（1964）で、コング少佐（Major Kong）が水爆にまたがって陽気に落下している姿が描かれ、かつ、その水爆には「ヤァー、こんにちわ！（HI THERE!）」という陽気なことばが書かれていたのと同じだ。見かけは陽気かもしれないが、内実は深刻で絶望的なのだ。

III

ここでちょっと余談になるが、ある日本人がホールデンの先の発言とほぼ同じ内容の発言をしているので、紹介しておこう。1907年生まれの山田多賀市氏は、兵役拒否の逃亡を決意したのは、「…もし私の計画が露見するか、失敗すれば、私は徴兵忌避の罪に問われ、憲兵の手で銃殺されることは免れないであろう。しかしその時はそれまでだ。いさぎよく殺されてやろう。戦争に引っぱられて死ぬより、自分で選んだ途で死ぬ方がましだ」（菊池 300）と考えたからだ、戦後の聞き書きのなかで証言している。逃亡による兵役拒否者は、発見されたら、銃殺刑に処せられるだろうが、それでも徴兵されて兵隊として戦場で死ぬよりマシだという主張である。山田氏は、1945年6月に逃亡による兵役拒否を実際に実行して、日本の敗戦による戦争終結まで逃亡をつづけた人物だ。1945年の戦争中の日本人によって考えられていた内容と、

1950年のアメリカでホールデンが考えていた内容がほぼ同じである。つまりホールデンの主張は、あきらかに兵役拒否の考え方と通底している。

以上のことを勘案すれば、ホールデンは、最初に引用した文では、簡潔すぎて意味が曖昧だったけれども、その真意では、今度戦争があつて徴兵されて戦場に駆りだされるぐらいなら、憲兵に逮捕されて銃殺される方がマシだと言っていることなる。つまり、戦場に駆りだされるぐらいなら、戦争からの離脱者として、つまり兵役拒否者として、銃殺刑になった方がマシだと言っているのだ。戦争反対の極端な意見を述べているのである。

しかも、最初に引用した文では、「あなた (you)」という単語を使って、読者に話しかける態度をとっている。言外の意味で、読者に同意を求めている。極端な反戦の意見への同意を、読者に間接的に求めている。だから、簡単には意味がとれない言い方になっているのだ。言いかえれば、その約1頁後の比較の意味のとりやすい表現で、反戦の考えを述べているのは、この部分はすべて「わたしに (me)」かんする「わたし (I)」の考えだという限定での、自分の考えの表明だったからである。読者に話しかけ読者の同意を求めるような表現ではない。心を病んで入院中のホールデンが、自分にかんする私的な意見として述べている。だから比較的わかりやすい表現になっている。読者に誘いかける文章でないから、つまり社会的な影響力が違う文章だから、その表現に違いが生まれたのである。

しかし、忘れてはいけないのは、ホールデンは、読者に同意を求めている一見すれば意味が不明瞭な文章においても、注意ぶかく読む読者には、同じ段落内で、その意味が明快に伝わるような工夫をしている点だ。ホールデンの戦争拒否の意志も、このときの作者サリンジャーの戦争拒否の意志もいずれも固いことをあらわしている。

IV

つぎに、この作品が書かれた時代についても考えておこう。この作品は、アレクサンダー (Paul Alexander) によれば (150)、1940年代に構想され、部分的に書きつづけられていたが、1950年の「大半」を使って書き、同年の「秋」に完成した。そして、この作品の時代背景は1949年12月から1950年の夏頃までである (野間 11-13)。だからこの作品には、作者がこの作品を書いていた時代の雰囲気反映されていると考えられる。それは、どんな時代だったのだろうか。

1945年の第二次世界大戦の終結によって、東ヨーロッパはソビエト連邦の影響下で共産主義化した。冷戦が始まったのである。それだけでなく、たとえば、中国では、第二次大戦後に始まった国共内戦の後、1949年10月10日には、共産党の毛沢東を指導者とする中華人民共和国が成立した。いわゆる共産主義の脅威が現実の事態となった。また、1950年6月には、北朝鮮と韓国との間に戦争が始まり、アメリカは、国連軍の中心となって北朝鮮の勢力と1953年7月ま

で戦った。また、米国内では、第二次大戦の終結により1947年にいったん停止された徴兵は、冷戦の深刻化とともに、1948年には選抜徴兵法が成立した。それによって、18歳から26歳までの男子に徴兵登録と、19歳から26歳の男子に21カ月間の兵役を義務づけられた。

こうした国内外の情勢を背景にして、アメリカ国内では1950年2月ころから1954年12月にかけて、マッカーシー（Joseph R. McCarthy）を中心とする、いわゆるアカ狩りと呼ばれるマッカーシイズムの狂気の旋風が吹き荒れていた。この狭義の愛国主義の旋風は言論や思想の自由の圧殺でもあった。

こうした狂気の旋風のただ中にあった作家サリンジャーは、作品中で、かつての級友キャッスル（James Castle）が「自分の言ったことを撤回するより、窓から飛び降りるのを選んだ」（170）ことに、ふかい同情と哀惜の念を感じているホールデンの姿を描いている。そのことで、たとえば、マッカーシイズムの犠牲になった一級の知識人活動家マシーセン（F. O. Matthiessen）を暗示して、その狂気の旋風を批判している。マシーセンは、最後まで「キリスト教徒で社会主義者（a Christian and a socialist）」であること表明しつつ、1950年4月1日に窓から投身自殺した（Sweezy 91-92）のである。もちろん自殺したのはマシーセンだけではなかった。陸井三郎はマッカーシイズムの犠牲になって自殺した12名の人間の名をあげている（305-06）。

一方で、ホールデンは、入院していた病院で、「僕は当時十六歳で、今は十七歳」（18）と語っている。あと一年以内に徴兵登録をして、二年以内に21カ月間の兵役につかねばならない状態だった。それだけでなく、先に述べたように、このときには朝鮮戦争がすでに始まっていた。

以上のことを考えれば、作家サリンジャーにとって、戦争や戦時体制が年々身近に感じられていてただけでなく、ホールデンにとっては、朝鮮半島という異国の戦場に送られることを身近な現実の可能性として感じられていたのは間違いないだろう。そういう切実な雰囲気のかで、ホールデンも作家サリンジャーも戦争を拒絶する気持ちを鮮明にしている。

V

ところで、戦争反対のもっとも典型的な人たちは兵役（徴兵）拒否である。アメリカの兵役拒否者は良心的兵役拒否者（Conscientious Objectors）と呼ばれることがおおい。そうした戦争に反対する兵役拒否者は、アメリカでも長い間迫害されてきた。たとえばコーン（Stephen M. Kohn）によれば（28-29）、アメリカでは、第一次大戦中、1918年4月に出された軍令によって、軍法会議（court-martial）で450人の戦争反対者が有罪となった。その内17人には死刑（ただし後に減刑された）が、142人に終身刑が、73人に20年の懲役が宣告された。3年以下の懲役はわずかに15人にすぎなかった。そして戦争反対者は刑務所内でも最悪の扱いを受けた。服役中に、少なくとも17人の受刑者が拷問や最悪の扱いのために死亡している。兵役拒否をつ

らぬくことは、文字どおり命がけだったのだ。入獄していた兵役拒否者も、1918年11月11日の休戦条約が締結されてから2年以内には刑務所から解放されたが、それでも市民権 (civil rights) は1933年のクリスマスまでは回復されなかった (O'Sullivan 137)。

第一次大戦から約23年後、サリンジャーが兵役についていた第二次世界大戦でも、良心的兵役拒否者はいた。統計では、72,354人の良心的兵役拒否者がいて、その内の大多数は非戦闘の兵役や民間の作業所で働いた。だが最終的に、6,086人が、裁判によって選抜訓練徴兵法 (Selective Training and Service Act of 1940) に違反しているとして刑務所に入れられた (Kohn 46-47)。ただし懲役期間は、最長で5年で、平均で35カ月間だった (Kohn 52)。もちろん第二次世界大戦中でも戦争反対者は、社会から嘲笑されたし、国家の安全にとって危険な存在と見なされていた (Kohn 48)。とうぜん刑務所での待遇も劣悪だった。たとえば、水を浴びせられて一晩中放置されたり、男色者とおなじ獄舎に入れられたりした (Kohn 52-53)。

このような歴史的な経緯を考えれば、とうじのサリンジャーが、戦争反対の意見を公的な場で明快に主張することは、政治的にだけでなく、身体的にすらかなり危険なことだと感じていたとしても不思議ではない。それだけでなく、兵役につくぐらいなら、銃殺された方がマシだという意見に、読者の同意を求めることは、とうじのアメリカの状況を考えれば、そうとう過激で危険な行為だった。たとえば、1949年になってさえ、ラリー・ガラ (Larry Gara) という兵役拒否者が、ひとりの若者に、徴兵登録拒否を教唆したとして、逮捕投獄されている (Kohn 48)。逆にいえば、入隊して戦場に行くぐらいなら銃殺された方がマシという主張は、多くの読者のおおっぴらな共感と同意をえるのはむしろ極端な意見だったと考えられる。

そのとうじのサリンジャーは、まだ30歳になったばかりの新進の作家だった。できるだけ多くの読者の支持と共感を獲得したいと願っていたことはじゅうぶんにありうる。だから、戦場に駆りだされるぐらいなら、戦争忌避者として銃殺された方がマシという極端な反戦の意見への同意を読者におおびらに求めることは、躊躇 (ちゅうちょ) せざるをえなかった。極端な反戦の意見は、多くの読者に公然と共感されて受け入れられるのは、むしろ推測されたからである。

そこで、サリンジャーは、最初の引用では、読者にちょくせつ語りかけて、読者の同意を間接的に求めていることもあって、意図的に曖昧な語り方をしたのだ。とうじの多くの人びとの公然たる共感を得られないような極端な意見を、あえてわかりにくい表現で読者にちょくせつ語りかけることで、その意見を理解してくれる読者には伝えようとしたのだ。

最後に要約すれば、冒頭で引用したホールデンが読者に語りかけている一節からは、精読すれば、まず、主人公のホールデンが兵役拒否の考え方に強い共感を抱いているのがわかる。つぎに、作家サリンジャーが、そういう兵役拒否の考え方を明快に主張し、読者の共感を公然と求めるのは得策ではないと判断していたのがわかる。最後に、サリンジャーのその判断は、この作品が書かれたときのアメリカ社会や世界情勢に強く影響を受けていたのがわかる。そして

そうしたことを、作品中の原文でわずか12行から読みとるのは、精読の楽しみでもある。

*本稿は、日本英文学会関西支部第3回大会（於：関西学院大学、2008年12月20日）でのシンポジウム「戦争と英米文学」における発表原稿を加筆・修正したものである。

〔引用文献〕

- Alexander, Paul. *Salinger: A Biography*. New York: St. Martin's Griffin, 1999.
- Cohen, Eliota. *Citizens & Soldiers: The Dilemmas of Military Service*. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Holden, Wendy. *Shell Shock*. 1998. London: Macmillan, 2001.
- Kohn, Stephen M. *Jailed for Peace: The History of American Draft Law Violators, 1658-1985*. Westport: Greenwood, 1986.
- O'Sullivan, John and Alan M. Meckler, eds. *The Draft and Its Enemies: A Documentary History*. Urbana: U of Illinois P, 1974.
- Pinsker, Sanford. *The Catcher in the Rye: Innocence under Pressure* (Twayne's Masterwork Studies No. 114). New York: Twayne, 1993.
- Salinger, J.D. "Sorry for Writers." *The Saturday Review of Literature* (August 4 1945): 20-21.
- . *The Catcher in the Rye*. 1951. Boston: Little Brown, 1991.
- Sweezy, Paul, M. and Leo Huberman, eds. *F. O. Matthiessen (1902-1950): A Collective Portrait*. New York: Henry Schuman, 1950.
- 麻生亨志「冷戦と文学」『ライ麦畑でつかまえて——もっと知りたい世界の名作④』田中啓史編（ミネルヴァ書房 2006年）91-100.
- 井上謙治「戦争小説とサリンジャー」『英語青年』（1989年11月号）18-19.
- .「戦争作家としてのサリンジャー」『ユリイカ』（1990年3月号）165-71.
- 菊池邦作『徴兵忌避の研究』（立風書房 1977年）
- 陸井三郎『ハリウッドとマッカーシズム』（筑摩書房 1990年）
- サリンジャー、J.D.『ライ麦畑でつかまえて』野崎孝訳 白水Uブックス（白水社 1984年）
- .『キャッチャー・イン・ザ・ライ』村上春樹訳（白水社 2003年）
- 田中啓史編『サリンジャー イエローページ』（荒地出版社 2000年）
- 檜崎寛「ホールデンの戦争と平和」『ライ麦畑でつかまえて——もっと知りたい世界の名作④』田中啓史編（ミネルヴァ書房 2006年）112-124.
- 野間正二『「キャッチャー・イン・ザ・ライ」の謎をとく』（創元社 2003年）

（のま しょうじ 英米学科）

2009年9月28日受理